



乳幼児期初期における子ども同士の交渉（その4）： 同年齢児による遊び場面における1歳児の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 純代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00002978

乳幼児期初期における子ども同士の交渉（その4）

—— 同年齢児における遊び場面における1歳児の場合 ——

遠 藤 純 代

問 題

乳幼児期初期における子ども同士の相互交渉に関する研究は、ここ数年の間に従来みられなかったペースで増えつつあるが、長期にわたり着目されてこなかったこれまでのブランクを埋めつくすところまではまだまだ至っていない。

研究数の増加によってもたらされた変化の1つは、研究対象の年齢の拡大である。1歳児だけでなく0歳児を対象とした研究が以前よりも多くみられるようになった。2つめの変化は、子ども間の相互交渉に及ぼす諸要因の効果の検討である。一定の要因を実験的に操作してその効果を測定しようとする研究も僅かであるが増えてきた。しかし、いずれにおいてもまだその全貌を明らかにするまでにはなっていない。また、研究のセッティングとしてラボラトリーでのプレイルームを利用している研究が多く、早期の年齢から自然で豊かな子ども同士の接触を保障している絶好の場ともいべき保育園での子ども間の相互交渉を問題とする研究は依然として少ない。特に中でも、互いに年齢差が少ない子ども（同輩）によるメンバー構成で、大人からの統制が少なく遊びの自由度が大きい場面設定で保育園児を対象とした研究はほとんどない。

このような問題意識にもとづき、筆者は前回、2～3名の同年齢グループ場面による自由遊び場面で、互いになじみのある2歳初期の保育園児における相互交渉を観察した結果について報告した⁽⁶⁾。主な結果は、①子ども間に社会的行動の相互的連続がなされる場合の方が、相互連続のなされない場合よりも多いこと、②交渉の中では相手に対する直接的な関心によって開始している子ども中心のコンタクトが最も多く、このコンタクトは物をめぐる争いよりも規模が大きいこと、③初頭働きかけのインタラクションへの発展性は言語随伴性と関係が深いこと、④ゲームには模倣が多いこと、などであった。では、1歳代の年齢においては、保育園児の同輩間の相互交渉はどのような様相を呈するのであろうか。

前回報告（その3）以降、保育園児間の相互交渉を問題とした研究がいくつか公表されたが、これまでにおこなわれた研究の中で、1歳代保育園児を対象とした遊びの自由度の大きい同年齢グループ場面による研究は依然として少なく、Holmberg, M. C. (1980)⁽⁹⁾の研究と鈴木牧夫ほか(1980)⁽¹⁰⁾の研究の2つである。Holmbergの研究では、同期的 (synchronous) 交換、すなわち社会的交換におけるパートナー相互による相手の活動への協調は、相手が大人の場合と同輩の場合とでは異なるか否かについて検討する目的で、デイケアにおける対保育者および対同輩との相互交渉を横断的に観察している。1歳代に関しては生後12か月、18か月の2年齢、さらには24、30、36、42か月をも含めた合計6年齢レベルを設定し、この年齢幅における子ども—大人間の交換と、

子ども同士間の交換とを比較検討している。鈴木らの研究は、保育所の乳児4名による生後14, 16, 18か月の時点での縦断的資料であり、やはり、子ども—大人間の交渉と子ども—子ども間の交渉を比較している。これらの研究は、分析単位を個々の社会的行動に限ることなく、社会的行動の相互交換（インタラクション）に置いて検討を加えている点でまず評価されるべきであろう。しかし、何分にも研究数が少なく、またいずれの研究も1歳代全体を十分網羅していない。このような研究状況において、本研究の目的は、保育園での同年齢グループによる自由遊び場面で互いになじんでいる1歳児の保育園児がおこなう相互交渉の特徴を把握することである。

方 法

1, 観察対象

観察対象は、函館市内の保育園（4か所、P園、T園、N園、S園と略称、いずれも主として生後1.5か月から2歳代までの乳幼児約20名を対象とする保育園である）の1歳児21名（男13名、女8名）である。対象児たちを発達年齢によって次の3群（各7名）にふり分けた。A群：DA 12～15か月（男5名、女2名）、B群：DA 16～19か月（男4名、女3名）、C群：DA 20～23か月（男4名、女3名）。対象児の選択は、発達年齢の点で同じ年齢群に属する他の子どもが同一園に1名以上いること、発達に著しい遅れがないことを条件とした。各年齢群を発達年齢および生活年齢の点で詳しく述べると、A群はCA：1歳0か月～1歳4か月（平均14.0か月）、DA：平均14.0か月、B群はCA：1歳2か月～1歳9か月（平均16.4か月）、DA：平均17.7か月、C群はCA：1歳6か月～1歳9か月（平均19.7か月）、DA：平均22.9か月である。なおDAの算出は、津守・稲毛氏の乳幼児精神発達質問紙によった。主に各対象児のクラス担任保育母に回答を依頼し、担任が回答不能な項目についてのみ母親に回答を依頼した。

入園時期別構成をみると、A群では生後1.5か月時入園3名、4か月・5か月・8か月・12か月時が各1名、B群では、生後1.5か月時5名、11か月・12か月時が各1名、C群では生後1.5か月時入園2名、2か月時1名、2.5か月時2名、5か月・16か月時が各1名であった。最短在園期間はA群で3.5か月、B群で3.5か月、C群で5.5か月（いずれも1名）であった。出生順別構成はA群が1人っ子4名、2人きょうだいの第2子3名、B群が1人っ子5名、2人きょうだいの第2子2名、C群が一人っ子3名、2人きょうだいの第2子2名、3人きょうだいの第2子、第3子各1名であった。

2, 観察期間

1976年9月～1977年8月。

3, 観察場所

各保育園の保育室で観察を実施した。保育室の広さはP園が13.2㎡、T園が9.9㎡と33.0㎡の2か所、N園が13.2㎡、S園が14.9㎡である。

4, 観察場面

同一園に所属する同じ年齢群中の対象児同士で^(註1)、2名以上を一組とした遊び場面を設定し観察

(註1) A群の1名とC群の2名は、対象児でない子どもを含んだ場面を各1回経験した。ペアとなった子どもは、A群ではDA 1；2の1名、C群はDA 2；05—CAは1歳代—の1名であった。A群は2名1組場面、C群では対象児2名とこの子どもから成る3名1組場面をおこなった。各場面に同席する子ども相互間のDA差は、後述するように、小さいものであった。

した。

遊び場面は午前の保育時間中の、いわゆる設定保育の時間帯に実施した。遊び場面は1回20分以上継続しておこない、そのうちに焦点を当てた子ども(ターゲット)について10分以上記録をとることを原則とした。従って、20分以上であればほぼ2名分の記録がとれることになる。各対象児につき2日間にわたり2回の遊び場面を実施した。前回報告でも述べたように、各対象児の各2回の場面における構成メンバー数を組織的に変える計画を研究開始時点でもっていたが、同年齢群に属する子どもが3名以上在園する園が少なかったため、この計画の遂行は甚だ不十分となった。実際にはA群ではメンバー2名による場面が10回、3名場面が4回、B群では2名場面が8回、3名場面が6回、C群では2名場面が3回、3名場面が9回、4名場面が2回であり、群による違いが大きいものとなってしまった。特に、A、B両群とC群との間で差が著しいのは、C群のデータ収集が時間的に先行してなされたこと、A、B群では各群内に所属している子どもが3名以上いる園が大変少なかったことによる。

また、各児2個の遊び場面においてペアとなる相手の子ども(たち)が毎回に異なる場合が、特にA、B群では大変少なく、多くは同一幼児(たち)との2回の遊び場面を経験したという形になった。2回目の観察が1回目とは異なる組み合わせにて実施されたのは、A群ではゼロ、B群では1回であり、これに対しC群では5回であった。ターゲットとそのペアになった子ども(たち)とのDAの隔たり(ペア児のDAマイナスターゲットのDAにてあらわすことにする)は、A群で $-0.5 \sim +2.0$ か月(月齢差の絶対値の平均は0.94か月、以下同様)、B群で $-3.0 \sim +2.0$ か月(平均1.10か月)、C群で $-2.0 \sim +2.5$ か月(平均0.84か月)であった。構成メンバーを性別の点でみると同性ペアはA群8回、B群4回、C群14回であった。ペアとなった子ども同士は各園にて互いに同一クラスに所属している場合が多かったが、クラスが異なる場合も若干あった。しかしいずれの園においても、クラス別保育の時間帯以外では(食事、自由遊びなど)、満1歳近い乳児からそれ以降の年齢の子どもたちは、日常相互に接触する機会を豊富にもっている。

使用遊具は園および観察実施日によって異なるが、各種ブロック(木製、ダイヤブロック、ニューブロックなど、かご、乗り物の車、小さい車、ボール、人形(各種)、ままごと道具、ラッパ、タイヤコ、タンバリン、ガラガラ、おきあがりこぼしその他であった。そのほとんどは各園に備えつけてあるものである。各種遊具のそれぞれの個数は十分であるようにまず留意したが、あらゆる種類の遊具が遊びグループの人数分だけの個数を含んでいるわけではない。

5. 観察実施手続

部屋の中央付近にはあらかじめ遊具を置いておいた。観察者(筆者)は子どもと共に入室するか、子どもの入室前に室内にいるかのいずれかであった。またカメラマンはすでに在室していた。子どもの入室後、子どもの様子をみはからいながら場面に慣れるまでは適宜働きかけをおこなった。慣れが生じたと思われる時点以降は観察者からの働きかけと子どもへの応待を最小限に控えること、応待は受容的であることを原則とした(争いなどによって激しい身体攻撃や泣きが生じた時、および、子どもに情緒不安定な様子が見受けられた時は働きかけが必要な事態とした)。観察者とカメラマン(教育心理学専攻の大学生が担当)は、本観察を始める以前に最低2、3日にわたって保育者と同じように日常保育に参加し、子どもたちに十分慣れるよう留意した。また必要に応じて、予備観察を実施した。

遊び場面に参加する大人は観察者とカメラマンの2名を原則としたが、担任保育者が同席した場合もあった(A群:3回、B群:6回、C群:2回)。これは、観察者とカメラマンが子どもたちにとっ

て親しみのある存在となるようにとの上述の手続きにもかかわらず、人見知りの激しい幼児が若干名いたことによる。これらの子どもたちの観察記録は、1つの園内においておこなう複数個の観察の中で最後に収録するようにしたが、それでもなお場面に対する子どもの参加に不自然さが残る恐れがあったため、クラス担任の同室となった。担任保育者が同席した場合にも子どもに対する働きかけ・応待の原則は上述のとおりとした。またその際観察者は観察・記録にのみ従事するようにした。

記録はVTRカメラ(ポータブル白黒1台)と観察者の自由記述式の筆記記録による。音声は室内1~2か所にあらかじめ設置したマイクからも合わせ集音した。観察は、ターゲットの行動をまず可能な限り記録し次いでペア児の行動もできる限り記録すること、交渉が生じた時は交渉そのものを記録することに留意した。

6. 結果の整理

ここでは各児につき2回の観察記録のうちランダムにとり出した1個の記録(従って各年齢群7個、計21個の10分記録)^(註2)を分析した。

第1に、これら記録の中でターゲットと他の子どもとの間に社会的行動(SB)が生じた部分、および以下に定義する近接、平行遊び、物中心のコンタクトが生じた部分に関し、逐次的行動記録をVTR記録と筆記記録から作成した。

社会的行動の定義は報告(その1)にならった。すなわち、SBは次の5種の行動を含む:(a)注視のみの生起、(b)社会的な方向性をもつことが明らかな行動(相手を「みる」行為が同時に生起しているか、または「みる」を前後に随伴している行動。SDBとする)、(c)社会的な方向性をもつかは明確でない(「みる」の随伴ないしは同時生起がない)が、社会的性格をもっと考えられる行動(たとえば、ふたれて顔をしかめ泣き出す。下線部がSB。以下同様)(d)SB(b)に属する働きかけ行動に対して受容的に生起しているが、「みる」を伴わない行動(例:目の前にさし出されたブロックだけをみて手をのびしふれようとする) (e)相手の領分に所属する事物に対する働きかけで「みる」行為の随伴ないし同時生起が判然としない行動(例:相手に近づき相手が手にしている人形をみて、人形に触れつかむ)、(d)と(e)は、ともに相手への関心よりも物への関心の方が優位であると予想される場合が多い。

SBの個々の区分は時間的まとまりと意味的まとまりの両方を考慮しておこなった。報告(その3)の(註2)で述べたように、1人の子どもから複数の社会的行動が短い間隔で(1.2秒以内)連続生起している場合であってもその個々の行動が社会的行動としての機能(意味)の点で異なる場合は、それぞれを独立したSBとして数えた(たとえば、「持っていたブロックを相手の子どもにひっぱられ、手を放す(①)」と「とられたブロックをつかみ、ひっぱる(②)」とは別々のSBとみなした。しかし、同一機能のSBが短時間のうちに連続生起している時には1つのSBとした。

第2に、以上の基準にもとづきSBを決定した後、ターゲットと他の子どもとの間のSBの相互的連続(交換)性に関して、次の4つのカテゴリーに従い整理した。①SDBインタラクション:メンバー相互間に最低1回以上のSB(b)(=SDB)の相互的連続があるSDBのまとまり。A、B2者間を例にとると少なくともA→B、B→Aの交換がある場合。②BEインタラクション:SB(c)、(d)、(e)のうち少なくとも1種の(SB)による1回以上の相互的交換がメンバー間になされているSBのま

(註2) このうちメンバー2名場面はA群:5個、B群:4個、C群:2個であり、同性ペア場面はA群:3個、B群:2個、C群:7個であった。担任保育者同席場面はA群:1個、B群:3個、C群:1個(いずれも3名場面)であった。

とまり、③混合インタラクション：SDB および、SB (c), (d), (e) (のうち少なくとも1種のSB) による1回以上の相互的交換があるSBのまとまり、④前インタラクション (PI)：相手が発したSBとの相互連続が前後に存在しないSB、(インタラクションは以下Iとも略記する) なおSB(a)は、①～④の構成要素とはみなさなかった。また、SBの相互連続性の基準は10秒以内に次のSBが生起していることとした。

第3に、子ども間の社会的影響状態(交渉)をより大きなまとまりにてとらえることを狙って、①近接、②平行遊び(P-P)、③物中心のコンタクト(O)、④一方的作用、⑤潜在的コンタクト(L-C)、⑥物一子ども中心のコンタクト(O-C)、⑦子ども中心のコンタクト(C)、⑧混合コンタクト、⑨その他コンタクト、の9つの分類カテゴリーを観察資料から設定した。このうち③～⑦は、報告(その1)において作成したカテゴリーで、定義と例は報告(その1)に詳述してある。今回、新しく作成したカテゴリーの定義は次のとおりである。

平行遊び：報告(その1)での「平行遊び」と基本的には等しい。すなわち、互いに近接した位置にて同種類の事物に対し同一ないしは類似した活動形式でもって働きかけているが、メンバー相互間には関心と行動を向け合っている明確な証拠がない状態のこと。ただし、近接した距離とは、(その1)とは異なり、約90cm以内とした。これは、①場面に使用した部屋が(その1)で用いた部屋より狭い場合が圧倒的に多く、新しい距離の基準を設定する必要があったこと、②この年齢の幼児の身体はほぼ1つ分に相当する距離であること、による。

近接：約90cm以内にて互いに異なる種類の事物を用いた異なる種類の活動に従事している状態。

混合コンタクト：メンバー間にSBの最低1回以上の相互連続が存在するが、交渉カテゴリー④～⑦の中の複数のカテゴリーによって成立するコンタクト。本資料にては、(i)一方的作用・O-Cの混合、(ii)O-C・Cの混合、の2つのタイプが存在した。

その他コンタクト：メンバー間にSBの交換がかわされるコンタクトであるが、O-CあるいはCの基準を満たさない内容を含むコンタクト。具体的にはメンバー双方にかかわれるSBにはSDBが1個も含まれず、しかもO-Cの基準を満たさないコンタクトがその例である。

交渉の単位区分の手続は次のとおりである：①同一種類の交渉は、10秒以内に連続生起していれば1個の交渉とみなす、②近接、P-P、O相互間、および、これらとこれら以外の他種交渉との間が10秒以内の間隔であっても個々に独立させて数える、③O-C、C相互間、および、O-CやCとL-C・一方的作用との間は、間隔が10秒以内であれば同一コンタクトとした。そして、O-Cとこれらの種の交渉とから成る場合は混合コンタクトとし、CがL-C、または一方的作用と結びつく場合は単にCとした。それは、Cはその定義上多様な内容を含みうるので、O-Cが他種交渉と結びつく場合と異なり、L-Cや一方的作用の部分は内容的にCの一部を構成しうるとみなせるし、またみなした方がより適切であると判断したからである。④大人(Ⓐ)喚起によるSB、および、Ⓐ喚起のSBによって開始されている交渉は除外する。⑤基準①、③に該当する交渉が10秒以内の間隔で連続生起しており、その間にⒶ向けのSB1個、またはⒶからのSB1個のみによって中断されている場合(ともにⒶ中断1個と称した)は、中断前後の交渉をまとめて1個の交渉とみなす。

結 果

1, 交渉の構成メンバー数

構成メンバーが3名である交渉は少なかった。全体で14例(7.3%)である。内訳は、近接2例(B, C群に各1), P-P7例(B群1, C群6), O2例(A, C群に各1), B3例(A群1, C群2)である。各群での交渉からメンバー3名構成による遊び場面の観察でみられた交渉の総生起数(112例)を抜き出し、この総生起数に対するメンバー3名構成の交渉の百分率を求めたところ12.5%であった。群別内訳は、A群:13.3%, B群:8%, C群:13.9%である。メンバー3名構成の交渉は全体の1割強であり、群差は認められない。群を無視して交渉の種類別に百分率を求めると、近接:14.3%, P-P:25.9%, O:22.2%, C:15.0%である。平行遊びと物中心のコンタクトにやや多い。なお、3名場面で出現した交渉総数のうちで、3名メンバーによるIを含む交渉の占める割合は7.7%であった。

2, 交渉の生起数

10分観察にて生起した交渉の平均数(一人当たり)を年齢群別に表1に示す。まず交渉の種類を無視した全体でみると、A群8.7回、B群7.6回、C群11.3回の交渉が生じている。A群からB群にかけて僅かの減少があるもののほとんど変わらず、一方C群では若干増加する傾向がうかがわれる(Hテストによる検定では、 $H/C=2.002$, $0.30 < P < 0.50$ で有意差はない)。

次に、交渉の内訳をみる。近接とP-Pの両方を合わせた値は、3群とも交渉総数の3分の1前後である。だが、A群とC群とでは近接がわずかで、平行遊びが30%前後であるのに対し、B群では近接が25%近くである。続いて、一方的作用は全体の1~2割である。この一方的作用においても、A, C群は10%余であるのに対しB群は20%余と、B群のみ異なった傾向がうかがわれる。コンタクトに関しては、OはA群で2割と多いが、他2群では1割未満である。またこのOは、近接とP-Pを除いた残りの交渉の中でみると、A群では最も多い交渉となっているが、B, C群では中央あたりの順位である。L-Cはいずれの群においてもわずかである。残りのO-C, C, 混合コンタクト、その他コンタクトの4つに関しては、生起数の点でみるとA, B両群に比較しC群がO-C, Cにてわずかながら多い値を示している。B群では混合およびその他の両コンタクトが僅少であるが、A, C群ではともに一定程度みられる。これら4コンタクトの総計を求めると、A群:3.0, B群:2.1, C群:4.6となり、A群からB群にかけてやや減少、C群になると再び増加の傾向がうかがわれる。ただし百分率の点では群間にさほどきわだった違いは認められない。O-Cは10%前後、Cは15%前後である。なおここで、O-CとCの各群での相対的比重をさらに検討して

表1 交渉の生起数

交渉 年齢群	近 接	P-P	小 計	O	L-C	O-C	C	混 合	その他	小 計	一 方 的 作 用	合 計
A	0.3 (3.3)	2.4 (27.9)	2.7 (31.2)	1.9 (21.3)	0.1 (1.6)	0.7 (8.2)	1.2 (13.1)	0.8 (9.8)	0.3 (4.9)	5.0 (57.3)	1.0 (11.5)	8.7 (100.0)
B	1.9 (24.5)	0.7 (9.4)	2.6 (33.9)	0.7 (9.4)	0.6 (7.5)	0.8 (11.3)	1.2 (15.1)	0.1 (1.9)	0	3.4 (45.0)	1.6 (20.8)	7.6 (100.0)
C	0.6 (5.0)	3.9 (34.2)	4.5 (39.2)	0.8 (7.6)	0.1 (1.3)	1.3 (11.4)	1.9 (16.4)	0.8 (7.7)	0.6 (5.0)	5.5 (49.4)	1.3 (11.4)	11.3 (100.0)

10分間の観察における平均数

みるため、O-CおよびCの両者が両者間、あるいは他交渉と混合しているタイプの交渉(「混合コンタクト」)に関し、その内訳となる交渉を各タイプにふり分けた時の値を考えてみる。すなわち、「一方的作用・O-C混合」は「一方的作用」と「O-C」とに、「O-C・C混合」は「O-C」と「C」とにふり分けてみる。その結果、O-CとCの10分当りの平均数(全交渉数に占める割合)は、A群ではO-C:1.6(16.5%)、C:1.9(19.6%)、B群ではO-C:1.0(12.8%)、C:1.3(16.7%)、C群ではO-C:2.1(17.4%)、C:2.0(16.5%)である。この値についても、平均数ではB群がO-CとCの両方にてやや落ちこみを示しているものの、A、C両群はあまり差がない。

最後に、個人別に交渉の総生起数をみると、まず個人によるばらつきが大きい。群毎に最小と最大の範囲を示すと、A群:3~12、B群:5~12、C群:2~20となる。特にC群にばらつきが大きい。SBを含む交渉が1回も生じなかったペアは皆無であったが、Iを含む交渉が1回もみられなかったペアは1組(C群)あった(このペアの交渉数は全部で7のうち4はP-Pであった)。O以外のコンタクト数は最小で1(A、B群に各1組)、最大で13(C群に1組)であった。

3. 交渉の持続時間

個人(ペア)毎にみた交渉の総持続時間に関する結果は表2の最右列に示してある。ペア差が著しい。最短は16秒であり、最長は約7.5分である。この両組はC群に属していた。一ペアでみられた交渉の総持続時間の中央値でみると、10分中A群は3.6分、B群は2.6分、C群は2.8分間はそれぞれ、近接状態以上の何らかのレベルの子ども相互間の社会的影響状態にあったことになる。群間を比べるとA群が最も長く、B、C群はほとんど変わらない傾向がうかがわれる。次に、交渉の種類別にみる。交渉によっては生起数が小さく群間の比較に耐えないものもある。生起数が相対的に多かったP-P、O、O-C、C、一方的作用に関して検討する。まず一方的作用が他交渉と比べて持続時間が短いのは、この交渉の定義からみて当然予想されることである。P-PはA群にやや長くみられる。逆にOはA群にてやや短い、O-CはA群が最も長く、B群、C群となるにつれて短くなる傾向がある。ただし、Hテストの結果は、 $H/C=4.534$, $df=2$, $0.10 < P < 0.20$ であった。Cに関しては年齢変化に伴う傾向は認められない。

表2 交渉の持続時間(sec.)

交渉 年齢群	近接	P-P	O	L-C	O-C	C	混 合	その他	一方的 作用	交渉の総 持続時間
A	*	24.0 (13~103)	9.5 (3~35)	/	33.0 (7~35)	10.5 (4~58)	39.5 (3~108)	*	4.3 (3~15)	216.0 (69~376)
B	13.0 (3~138)	15.0 (4~42)	15.0 (4~35)	(6.0) (5~14)	16.5 (4~41)	25.5 (8~78)	*	/	6.0 (2~25)	163.0 (94~239)
C	13.5 (12~31)	15.5 (4~106)	15.0 (2~28)	/	7.0 (3~20)	18.0 (4~138)	87.8 (13~47)	(18.5) (7~34)	5.4 (2~14)	170.0 (16~452)

○各欄の数字は、上段:Mdn, 下段:rangeである。

○斜線は生起数がゼロ、*は生起数2以下、[]は生起数がいずれも4である。

○交渉の総持続時間とは、各対象児に生じた全交渉の持続時間の総計に関しての、対象児間の中央値である。他の列の数値は、一交渉当りの中央値である。

4. 交渉の内容

全交渉の中で事物が一切関与していない交渉はわずかであった(6.7%)。事物なしの交渉は一方的作用とCにみられ、過半数はNムード(後述)を含んでいた。

物中心のコンタクトにて使用された事物の中で最も多いのはおもちゃ箱であった(12例:50%)。次いでブロック(5例)で、これには積む・並べる・つなぐなどして作ったブロック作品も含まれる。

表3 交渉のモード

交渉 モード	一方的作用	L-C	O-C	C	混合・ その他	全体
P	77.8	66.7	15.0	55.2	31.6	49.5
N	22.0	16.7	85.0	10.3	15.8	29.7
P・N混合	0	16.7	0	34.5	52.6	20.8
計	100.0 (27)	100.0 (6)	100.0 (20)	100.0 (29)	100.0 (19)	100.0 (101)

%(生起数)

その他、乗り物の車、ままごと道具、人形、押入れの段の裏板であった(各2～3例)。なお例数の計がO総数と一致しないのは複数の種類の物を含む例があったからである。

次に、SBを含む交渉である一方的作用、L-C、O-C、C、混合、その他コンタクトについて、交渉を支配する感情的色彩(モード)の点から検討する(表3)。ここではネガティブな(N)モードとは非友好的なモードを、ポジティブな(P)モードとは明確にネガティブと判定されないモードをさす。交渉全体でみると、純粹のPモードは約半数、純粹のNモードは30%であり、混合モードが20%である。SB(a)を除いたSBの相互連続を含まない一方的作用とL-Cにては、混合モードはきわめて少なく、大部分はポジティブなモードである。続いて交渉別に分析をおこなう。

Pモードの一方的作用で最も多い内容は模倣で、Pモードの一方的作用全体の3分の1を占める。第2は、相手が手にしている物に触れる場合で(5例)、その他、身体接触と接近、発声、説明の順である。他方、Nモードの一方的作用では、偶然に相手の体と接触した結果、接触された子供側からの抗議・攻撃・物の確保の行動がひきおこされたケースが3分の2を占めている。

L-CにおいてもNモードのは、偶然的接触に対する反応としての抗議であり、その他のL-C(PおよびPN混合モード)では、まず相手に接近し、その後何らかの行動をするタイプが最も多い。接近後の行動は、模倣・物の確保・動作というものであった。

NモードのO-Cは、すべて、他の子どもが手にしている物を自分側に確保しようとして、その子どもの反撃にあう物をめぐる争いであった。PモードのO-Cには、①一方の子どもがさし出した物に対し、他方の子どもは、その物にのみ視覚的注意を向け、さし出す子どもをみることなく物を受け取る(2例)と、②相手の手にする物をつかみ、とるのであるが、相手側はとられまいとする、ないしはとり返そうとする行動を示さず、とった側の子どもは代りに(とでも表現できるかのよう)自分の手にする物をさし出す(1例)とがあった。

PモードのCの中で最も多いのは模倣である(全16例中6例)、その他、演示、待機・追従、物の譲渡、発声、要求一応待である(各3～1)。(なお複数の内容から成る場合は次の手順に従った：①SB数の点でより多くの比率を占める内容でもって代表させる、②①の基準にて決められない場合は、働きかけがより直接的で強力と思われる内容でもって代表させる)。NモードのCはA群のみにみられ、いずれも身体攻撃であった。混合モードのCのPN構成はさまざまであった：①P-N(働きかける側がPモードで反応側がNモード。以下、ハイフンの前は働きかけ側の、後は反応する側の各モードをあらわす)、②P→N(矢印は時間経過に伴う変化を示す)、③P→P-N、④P→P-N→Pの4種がみられた(各2例)、さらにそれらの具体的内容も多様であった。①は譲渡一拒否と身体接触一抗議、②は確保・譲渡など→攻撃と接近・傍観→攻撃一抗議、③は接触・演示・相互模倣→接触一抗議・攻撃と演示→接触一抗議、④は相互模倣→接触一防衛→模倣、譲渡→要求

一拒否→要求→同意であった。これらの中でPムードのCの内容となる行動は多種であるが、P-N型(①のような純粹タイプあるいはP-Nを一部に含むタイプ)では、接触した結果相手から抗議・攻撃をひきおこすケースが多いようである。

混合コンタクトは「O-C・C混合」と「一方的作用・O-C混合」の2タイプから成立しているが、まずO-C・C混合からみていく。ムード構成は、P→②、②→P、N→③、P→③→P、P-N→④(O印はO-Cの部分)と多様であった。O-CおよびCとが時間経過の中で占める位置も様でないが、O-Cはすべて物をめぐる争いである。CはPムードが多い。Cにてみられた個々のSBの行動内容は多岐にわたるが、多い順からいうと譲渡、模倣となる。他方、「一方的作用・O-C混合」における一方的作用はすべてPムードで、中でも模倣が多く(7例中5例)、時間経過としては一方的作用によって開始され、続いてO-Cと移るタイプがすべてであった。

その他のコンタクトではPムードが多く(4/6)、これはすべて相互模倣であった。以上、全体に模倣を含む交渉がかなりあるが、Pムードあるいは混合ムードのSBを含むコンタクトにおいてPムードの各個所の総計の中で模倣(主に模倣から成るケース、および、一部に模倣を含むケースの数)の占める割合を求めたところ、48.6%であった。

5. 交渉の規模

交渉の規模は持続時間の側面からもとらえることができるが、ここではSB数などの角度から分析する。

一方的作用に関する結果は表4に示すとおりである。Pムードについては年齢群別にも結果が示してある。Nムードは数が少ないため全群こみにした値のみを示してある。P、Nいずれのムード

にてもSBの平均数は1.3前後と小さい。Pムードだけについてみても年齢差はあまり認められない。この一方的作用に対しL-Cはやや規模が大きい。L-C全体でSBの平均数は2.5であり、L-Cの生起数の点でいえばその3分の2はSB2個から成っている。

次にO-Cについてみる。まずPムードのO-Cは全5例と僅少のため偶然性に左右されている可能性があるが一応記す。インタラクション内に含まれないSBは1つもなかった。一交渉当りの平均SB数は4.40、1つのIを構成するSBの平均数(平均ユニット数)は3.14であった。またSBに関しては、PムードのO-Cという性格からして当然SDBが少なくなると考えられる。結果は、SDB以外のSB数が全SB数中の7割を占めていた。

続いて、NムードのO-Cについてみる。表5は、NムードのO-Cのみから成る交渉(純粹O-Cと呼ぶ)、およびO-Cをその一部として含む交渉(すなわちO-C・C混合と一方的作用・O-C混合の両コンタクト)中のNムードのO-Cの個所を対象に、PI数、I数、SB総数、Iの平均ユニット数の点から分析した結果である。PI数+I数の合計の中でPI数の占める割合はごくわずかである。1個のIの平均ユニット数は約4である。群間比較をすると、SB総数・Iの平均ユニット数の点でA、B両群よりもC群の方が少ない傾向がうかがわれる。

Cについて検討する。Nムードのみから成るCは身体攻撃が多く、これ以外のムードのCとは性格をやや異にすると考えられる。すなわち、NムードのCにおいては相互交渉の発達は交換の規模の側面よりは内容の面においてあらわれると予想される(たとえば、身体攻撃から言語的攻撃への移行)。従って、ここではPムードおよび混合ムードのCを検討の対象とする。表6がその結果であ

表4 一方的作用の規模

項目	P ム ー ド				N ム ー ド	全 体
	A群	B群	C群	全体		
SBの平均数	1.3	1.8	1.1	1.4	1.2	1.3
SDBの%	62.5	90.0	70.0	75.9	71.4	75.0

表5 NムードのO-Cの規模

	㉑ PI数	㉒ I数	㉓ A+B	㉔ B/A+B	㉕ SB総数	㉖ Iの平均 ユニット数
A群	0.2	1.9	2.1	0.90	8.8	4.5
B群	0.7	1.3	2.0	0.66	7.7	4.7
C群	0.2	1.5	1.7	0.90	5.7	3.8
O-C全体	0.3	1.6	1.9	0.85	7.4	4.2
純粋O-C	0.4	1.8	2.2	0.83	7.7	4.2
混合O-C	0.1	1.5	1.6	0.94	6.8	4.1

註(1) ㉑-㉓、㉕は交渉当りの平均数。

(2) 純粋O-Cとは、O-Cのみから成る交渉を、混合O-Cとは、O-Cをその一部として含む交渉(O-C・C混合コンタクトと一方的作用・O-C混合)をさす。混合O-Cの場合は、O-Cの部分(Nムード)のみを分析対象とした。年齢群別の値は、純粋O-Cと混合O-Cとをこみにした時の数値である。

表6 子ども中心のコンタクトの規模

項目	㉑ PI数	㉒ I数	㉓ A+B	㉔ B/A+B	㉕ SB総数	㉖ Iの平均 ユニット数
A群	2.2	2.3	4.5	0.51	11.4	4.0
B群	2.0	1.3	3.3	0.40	7.1	3.8
C群	2.4	2.0	4.4	0.46	9.1	3.4
全体	2.2	1.9	4.1	0.46	9.4	3.7

ここでは、「Cのみから成る交渉+Cを一部に含む交渉(O-C・C混合)」におけるPムードおよびP・N混合ムードのCの部分分析対象としてある。

る。なお、単独で存在するC(純粋C)だけでなく、「O-C・C混合」でのCの個所(のうちのPムードと混合ムード)をも対象とした。全月齢をこみにすると、平均して2個強のPIと2個弱のIから1つのコンタクトが構成されている。Cに関する結果をO-Cについての結果と比べると①PIはO-CよりもCに多い($\chi^2=24.504$, $df=1$, $P<0.001$)、②I数はCの方がO-Cより若干多いようであるが大差ではない、③SB総数ではCの方がやや多いようである、④Iの平均ユニット数はCにやや多いが大差ではない、ことがわかる。年齢上昇に伴う特徴的な変化は認められない。SB総数、平均ユニット数においては、A群がB、C群よりも多い値すら示している。

表7 SBの構成からみたNムードのO-CとP・混合ムードのC

		インタラクション			SDB率	I数
		①	②	③		
NムードのO-C	A群	23.5	47.1	29.4	0.27	17
	B群	22.2	11.1	66.7	0.46	9
	C群	15.0	40.0	45.0	0.23	20
	計	19.6	37.0	43.5	0.28	46
P混合ムードのC	A群	66.7	0	33.3	0.59	21
	B群	83.4	8.3	8.3	0.92	12
	C群	82.1	0	17.9	0.93	28
	計	77.0	1.7	21.3	0.92	61

①、②、③はインタラクション合計に対する、SDBインタラクション、BEインタラクション、混合インタラクションの各々の百分率である。

6, O-CとCにおけるSB構成

SDBとSDB以外のSBの比率をNムードのO-C(およびO-Cの個所)とPムードおよび混合ムードのC(およびCの個所)に関して記したのが表7である。PIはO-Cにてその生起数が少なかったため記載していない。PIに関して全群こみの値でみると、O-CではPI中のSDBの百分率は71%(但し全例数は少ないが)、Cでは94%である。Cにおいては年齢差はない。次にIの点では(表7)、O-C全体ではSDBインタラクションが2割、BDEインタラクションと混合インタラクションが各4割である。群間比較をすると、B群ではBEインタラクションが他2群よりも少ない傾向があるが、例数が少ないため、偶然性に左右されている可能性が大きい。Cにおいては、どの年齢群でもSDBインタラクションが圧倒的に多く、BEインタラクションはほとんどない。

7, 交渉間の連続性

SBを含む交渉が発生する状況を分析するための1つの手がかりとして、交渉間の連続性を検討する。

まず、Iを含む交渉であるO-C、C、混合コンタクト、その他コンタクトに関して直前にどのような交渉が存在するかを調べた。これら交渉を全部まとめた値(全68例)のなかで、いかなる種類の交渉もが直前に存在しない交渉の占める割合は60.3%であった。約4割は、何らかの交渉の直後に発生しているわけである。内訳は、近接またはP-P:11.8%、O:13.2%、SBを含む交渉:14.7%である。ただしここで注意しておきたいのは、「いかなる種類の子ども間の交渉が直前に存在しない」場合の「直前の状態」の中には、場面に同室する他の大人とターゲット間、あるいは/および、ターゲット以外の子どもと大人間の交渉が生起している場合も含まれる。本研究ではこのような場合を、「それらメンバー間の交渉」として扱ったが、子ども同士の関係にのみ着目すると、少なくとも近接の状態にあるケースが含まれている。例をあげると、2名の子どもと観察者が同席する場面において、(A)観察者がターゲットでない子どもと向い合って座り、その子どもは観察者にブロックをさし出したり渡したりしている。ターゲット児は、この2名のすぐそばにて手の中のブロックをいじっている。(B)続いて、2名の子ども間に物をめぐる争いのO-Cが発生する(A群のNo.4の対象児)。この場合(A)の部分、非ターゲット児と観察者との間のインタラクションを含む交渉として評価されるのであるが、ターゲットと非ターゲット児との関係に重点を置いて評価すると、「潜在的な平行遊びないしは近接状態」とみなせる。この種のケースをも「近接またはP-P」に含めて改めて%を算出すると、直前に交渉なしは45.6%となり、近接ないしはP-Pが存在する場合は26.5%となった。すなわち、SBを含む交渉の過半数は近接以上の何らかの社会的影響状態の中で発生すること、中でも近接・平行遊びの中で発生するものは約4分の1であることがわかる。

次に、Iに至らなかったSBを含む交渉である一方的作用とL-Cに関しては、直前に、交渉なし:70%(61%)、近接またはP-P:18%(27%)、O:9%、SBを含む交渉:3%という結果であった(括弧内は「潜在的近接・P-P」を「近接・P-P」に含めた時の値)。PIから成る交渉は、直前に何らかの子ども間の影響状態がない状況下で発生する場合は過半数を占めるが、Iを含む交渉と同様に、近接や平行遊びの状態の中で発生するのは約4分の1であるといえる。

8, ゲーム

PムードのCおよびCを一部に含むコンタクト(O-C・C混合コンタクト)をゲームの観点から分析する。ゲームの定義および種類に関する詳細は、前報告(その3)に述べてある。ゲームとは、①メンバーの相互的参加 ②行為の順番の交代 ③2往復(ユニット数4)以上の連続した行

為交換 ④想像性・虚構性の存在,を基礎に成立しているSBのまとまりである。種類は、(a)模倣ゲーム、(b)役割補完ゲーム、(c)役割逆転ゲーム、(d)混合ゲームの4つが、メンバー相互間の役割関係の観点にもとづき整理されている。なお、上述の基準③にて交換が1往復か1往復半の場合は準ゲームとなる。

分析の結果得られたゲームは3例(9.4%)で、すべて模倣ゲームであった。A群にのみ見いだされた。準ゲームは9例(28.1%)で、うち模倣準ゲームが8例(A群2、C群6)、役割補完準ゲームが1例(B群)であった。ゲームまたは準ゲームがみられたペア数はA群では4組、C群では1組であった。行為の具体的内容は、模倣ゲーム・準ゲームでは、カップを口にあて飲む真似をする、ラッパ(の広がった方の部分)を口にあて「アー」という、「アー」という、発声(「アーア」など)しながら体や首を左右に振る(以上A群)、相手の方にブロックを持つ手または人さし指を伸ばし発声(パンパン、ビュンビュンなど)してからその手を降す(以上C群)、であった。また個々のコンタクト中にてゲームの占める割合を、「ゲームに直接関係したSB(ゲームで用いた行為を遂行しているSB)数/SB総数」によってみると、コンタクトのすべてあるいは大部分がゲームによって占められているものが大変多かった(ゲーム+準ゲームの計12例中10例)。さらにこのゲームに関係したSBの中でIの成分となっているSB(すなわちゲームを構成しているSB)の占める割合はA群で64%、C群で46%であった。

考 察

まず、一歳代全般にみられる子ども間の交渉の特徴について考えてみよう。

メンバー3名構成による場面で出現した交渉総数に対するメンバー3名による交渉数の割合は、1割強であり、Iを含む交渉における百分率は8%以下とさらに低い値であった。このように、1歳代では同輩グループ場面でSBの相互交換がなされる交渉は、1名の相手に対して成立する場合は圧倒的に多いことは、他の研究結果^(2,4,6,7,13,16)と一致している。

同輩との交渉において事物が一切関与していない交渉は大変わずかであった。また、Oは年齢群によって若干の違いが見受けられるとはいえ、全体として一定の比率を占めている。本研究と同一の観察実施手続によっておこなった前回報告の2歳初期児の結果とは、交渉の単位方法がやや異なるため厳密な比較はできない。しかし、Oに関しては算出方法がさほど異ならないのでラフに比較してみる。2歳初期では10分当り0.3未満であったから、1歳代の方が物中心のコンタクトが多いといえるだろう。さらにO-Cに関しても、前回より近似した方法(混合コンタクト中のO-Cの部分を純粋O-Cに加算する)によって求めた値でみると、平均数1.0~2.0(近接とP-Pを除いた残りの交渉合計の中の20~30%)の範囲にほぼ入っており、これは2歳初期(平均数0.9, 13%)よりも多い。O-Cはその定義からすると、物に対する関心の優位性が当然予想されるのであるが、本研究結果においてもこのことは立証された。すなわち、「相手を見る」という点では社会的な方向性を明確にもっているSDBのみから成るインタラクションは少なく、「みる」行為の伴いがないSBを含むインタラクションが多かった。また、Pムードの一方的作用の約4分の1は相手が手にしている物に触れる内容であった。以上の諸結果から、1歳代では子ども間の交渉において事物は重要な位置を占めること、事物に対する関心を中心となって開始される交渉が一定の重みをもつことが示される。

交渉を支配する感情的色彩では、①一方的作用とL-CではNムードのものは大変少なく、いず

れにても偶然による身体接触に対する反応としての抗議・攻撃・確保行動がほとんどである。②Iを含むコンタクトでNムードから成るコンタクトの中では物をめぐる争いであるO-Cが多い。③Cを含むコンタクト、および一方的作用・O-C混合コンタクトにおいて、Nムードによって交渉が開始される場合はわずかである。また前者のコンタクトにおけるCの個所が純粹のNムードのものは少ない。①～③から、偶然的な身体接触や事物を確保したい要求以外の原因にもとづいて相手に対する直接的な敵意によって開始される交渉は大変少ないといえる。

相手に対しなされるポジティブなムードの社会的行動の中では模倣が重要な役割をもつ。このことはゲームに関していえる。

SBを含む交渉は子ども間の何らの影響状態の中で発生する場合が約半数であること、中でも子ども同士が距離的に近い位置にあることは少なくともこの年齢段階では子どもに対する社会的行動の出現にとって重要であることを示唆する。

次に、生後2年目という1年間の中で同輩間の交渉に認められる発達の変化について考えてみよう。

1歳代にみられるこの発達の1つの側面は、交渉における事物の意義の変化である。この年齢の交渉では事物が関与している場合が大変多いことは前述したとおりであるが、問題は、物の役割の変化である。すなわち、事物に対する直接的な関心をきっかけとして生じる偶然的な、あるいは結果的な交渉が優位である段階から、相手に対する関心を基礎に相手に働きかける目的交渉か、相手への関心と事物への関心とを統一させた交渉が優位な段階へと変化する^(5,10,11)。この点に関し本研究結果をみってみる。まず、OがA群では他2群と比べると多い割合で生起する傾向がうかがわれる。またO-Cの持続時間とNムードのO-Cの規模の点では年齢上昇に伴い、わずかながら減少傾向がある。NムードのO-Cについては、そのSB総数とIの長さがA、B両群よりもC群にて低い傾向がある。これらの結果は、上述の発達の変化を支持する方向にあるといえる。

しかし、目的・統一的交渉の要である子ども中心のコンタクトにては年齢変化に伴う明らかな差をみい出すことはできなかった。Cの生起数および交渉全体に占めるその割合には3群間に差はほとんどない。Cの持続時間ではA群がB、C群よりやや短いようであるが、コンタクトを構成するSB総数やコンタクトにおける孤立したSBとIとの相対的頻度、I1個当りの平均SB数においては、A群の方がC群よりもわずかながら多い値すら示す。ゲームについても準ゲームの数はC群に多かったが、少数しかみられなかったゲームは皆A群で生じている。また全般にB群に落ちこみ傾向がうかがわれる。交渉の総生起数、総持続時間、I数・SB総数・PIとIの相対的頻度からみたCの規模、準ゲームをも含めた時のゲームの頻度の諸点において、A群からB群にかけて減少、C群になると再び増加というパターンがみられる。近接、一方的作用はB群の方が他2群よりも多い。

以上まとめてみると、OとO-Cに関する一部の結果において1歳初めの月齢の方が1歳代のそれ以降の月齢よりも物への関心の優位であることが示唆される以外は月齢上昇に伴う進歩傾向を見い出すことができなかった。特に子ども中心のコンタクトを中心とした成長——O-Cとの比較におけるCの相対的頻度やIの長さやI数の増加——などを予想していたのであるが、予想を裏付ける結果はほとんど得られなかった。それはA群に比べB群が落ちこみを示すことと、C群がA群とあまり変わらないことの2点に集約される。

このような結果がもたられた原因として次の諸点が考えられる。

第1は、観察対象の場面への参加の問題である。観察場面で子どもが良好のコンディションの下で遊びに参加したかどうかは基本的な前提条件ともいえるが、日常から人見知りの強い子どもやコンディションの変動が激しい子どもにとっては特に大事である。方法で既述したように、この対策

としていくつかの配慮をしたが、なおかつ十分とはいえなかったのではなからうかということである。観察実施直後のメモ、各児に関する担任保育者からの情報、VTR記録から判断してみると、場面における子どもたちのコンディションが必ずしも良好とはいききれないことが明白なケースはA群：1、B群：2、C群：1であった。B群にやや多い。このことがB群における落ちこみ傾向をもたらした1つの原因かもしれない。

第2は子どもの個人差である。たとえば、乳幼児の同輩との交渉能力が母親への愛着の安定性と関連があると指摘する研究がある (Easterbrooks, M. A., & Lamb, M. E.⁽³⁾ Pastors, D. L.⁽¹⁴⁾)。前者の研究では18か月児、後者の研究では20～23か月児を、いずれも子ども同士2名1組とし、母親同室の下で自由に遊ばせ、上記の関連性について調べている。概括的には、母親への安定性が大きい子どもは小さい子どもよりも、子ども向けの社会的行動がより活発であるという結果が得られている。本研究では、見知らぬ子ども同士ではなくなじみのある子ども同士による場面であるが、このような場面においても母親への愛着の安定性における差が子ども間の交渉能力における差に影響を与えているかもしれない (本研究では対象児について愛着の安定性に関する資料を収集してないので検討しえないが)。

第3に考えられるのは、場面の人数構成の要因である。研究実施の経過から本研究では2名場面と3名場面とが不規則な形で混じる結果となってしまった。そして3名場面はC群に特に多くなってしまった。既述したように、1歳代では相互に社会的行動を向け合う交渉は1名の相手に対しなされる場合が大部分である。Mueller^(12,13)によると、この1対1の (dyadic) 相互交渉は、1対1の文脈下で育てられるという。彼の研究では、生後16.5か月の男児による遊び場面の観察を実施する際、2名1組場面と6名1組場面の2場面を設定し、同輩間の相互交渉に及ぼすグループの大きさの効果を調べている。結果は、2名場面では協調したSDB数をはじめとしたSDBインタラクションの11の測度において月齢上昇に伴い増加がみられたが、グループ場面では変化がなかったという。そして、グループ場面では子どもが多く、そのことがインタラクションを継続させる上で必要な注意をそらしてしまうからではないかと述べている。だが、本資料にては、整理が甚だ不十分な段階にあるが、SBによる交渉が当該交渉に参加していない他の1名の子どもの参加によってあるいはその子どもの活動を交渉への参加者がみることによって中断されるケースはあまりみられないようである。しかし、Muellerの指摘する特性以外の、今だ明らかにされていない何らかの特性が3名以上の人数による場面に含まれているのかもしれない。

第4の問題は、何よりもサンプル数が少ないことである。各群7名という構成で、しかも分析に用いたのは10分記録が7回という少数の標本であるため、個人差や観察回における偶然性に結果が大きく左右されてしまったことは考えられる。サンプル数を増やし、相互交渉に関与すると思われる諸要因の分析を加えた研究が今後必要であろう。

文 献

- (1) 青井教子・宮川充司・小嶋秀夫 1981 1歳児を中心とした子ども間の相互作用——自然的観察法の検討 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 68-69,
- (2) Bronson, W. C. 1975 Developments in behavior with age-mates during the second year of life. In Lewis, M. & Rosenblum, L. A.(eds.), *Friendship and peer relations*. John Wiley & Sons, 131-152,
- (3) Easterbrooks, M. A. & Lamb, M. E. 1979 The relationship between quality of infant-mother attachment and infant competence in initial encounters with peers. *Child Developm.*, 50, 380-387.

- (4) 江口純代 1976 保育園の1歳児の相互交渉について 北海道教育大学紀要(第1部C) 第27巻1号, 23-33.
- (5) 江口純代 1978 乳幼児期初期における同輩関係の発達 北海道教育大学紀要(第1部C) 第29巻1号 221-233.
- (6) 江口純代 1979(a) 乳幼児期初期における子ども同士の交渉(その1)——0歳から3歳までの子どもたちによるあそび場面における1歳児の場合——北海道教育大学紀要(第1部C) 第29巻2号 161-174.
- (7) 江口純代 1979(b) 乳幼児期初期における子ども同士の交渉(その2)——0歳から3歳までの子どもたちによるあそび場面における2歳児の場合——人文論究(北海道教育大学函館人文学会) 第39号, 57-68.
- (8) 江口純代 1980 乳幼児期初期における子ども同士の交渉(その3)——同年齢児による遊び場面における2歳児の場合——北海道教育大学紀要(第1部C) 第30巻2号, 395-411.
- (9) Holmberg, M. C. 1980 The development of social interchange patterns from 12 to 42 months. *Child Develpm.*, 51, 448-456.
- (10) Maudry, M. & Nekula, M. 1939 Social relationship between children of the same age during the first two year of life. *J. Genet. psychol.*, 54, 193-215.
- (11) Mueller, E. & Lucas, T. 1975 A developmental analysis of peer interaction among toddlers. In Lewis, M. & Rosenblum, L. A. (eds.). *Friendship and peer relations*. John Wiley & Sons. 223-258.
- (12) Mueller, E. & Vandell, D. 1979 Infant-infant interaction : a review. In Osofsky, J. D. (ed.) *Handbook of infant development*, Wiley Interscience, 591-622.
- (13) Mueller, E. 1979 (Toddlers+toys)=Autonomous social system. In Lewis, M. & Rosenblum, L. A. (eds.) *The child and its family*. Plenum Press, 169-194.
- (14) Pastor, D. L. 1981. The quality of mother-infant attachment and its relationship to toddlers' initial sociability with peers. *Developmental Psychology*, 17, 326-336.
- (15) 鈴木牧夫・本郷一夫・布施佐代子 1981 乳児の社会的相互作用の発達(1)(2)(3) 日本教育心理学会第23回総会発表論文, 282-287.
- (16) Vandell, D. L. 1976 Toddler sons' social interaction with mothers, fathers, and peers. Unpublished Ph. D. dissertation, Boston University. (文献(13)による)

<付記>

本研究をおこなうにあたり、函館市内の旧昭和子どもの家、旧のびろ共同保育所、旧ぼっぼの家、旧たんぼぼ共同保育所の諸先生方ならびに父母の方々にはひとかたならぬお世話をいただきました。現在これらの保育所はすべて認可保育園(コバト保育園、青い鳥保育園)として発展解消しました。未認可保育所として当時諸面において大変な中を全面的な御協力をいただきましたことに厚くお礼を申し上げます。また教育心理学専攻の学生の皆さんにはカメラマンとして協力いただきました。謝意を表します。なお、本研究の一部は昭和54年度北海道科学研究費の補助を受けました。

(本学助教授 函館分校)